［社　会］

郷土愛を育てる地域学習の工夫

－地域の人々とのふれあい体験を通して－

五十嵐一浩*

1　主題設定の理由

「将来も太田地区に住み続けたい人？」と聞くと，昨年の３年生と同様，今年の３年生も「絶対出る」「多分住まないと思います」と返ってくる。続けて「太田地区の棚田でできるお米がおいしいのはなぜ？」と聞くと，「おいしいんですか？」と逆に質問が返ってくる。生徒の直接経験地域である太田地区に対する，愛着や誇り，知識や関心の薄さに社会科を指導してきた教師として，忸怩たる強い思いがあった。なぜなら，社会科学習は学習を通じて社会貢献の実践力を養い，さらに社会に貢献する実践が伴わなくては本当の学習とは言えないと考えていたからである。

そこで，地域の人との出会いやふれあいを通して地域学習を行い，郷土愛を育てる授業を実践することとした。この構想の裏付けとなったのは，小森ケン子のふれあい体験を生かす社会科授業の実践である。小森は信濃川とのふれあい体験活動を通して「信濃川を愛する子どもになってほしい。そして，ふるさとを再発見し，郷土を愛する子どもになってほしい」*1 との願いで授業を行った。その学習の結果，郷土を愛する心が確実に育ってきたことを報告している。

また，清水章夫は社会科における郷土学習のねらいとして，「（社会事象の一般的・普遍的な）原理や法則を理解するとともに，これを応用して身近にある諸現象を理解し，自分が生まれ育ち生活している郷土をよりよく改善しようとする意欲やそれができる能力の基礎を，児童生徒の内面に育てていくことでなければならない。」*2 と述べている。清水の指摘は小森の実践を支持するものである。さらに，体験学習を主体にした地域学習は「知っている」「見たことがある」といった表層面をなぞるような机上の学習からの脱却を可能にする。岩田一彦は「学習は，体験・経験と概念・用語との往復運動の中で成立する。問いは，体験，経験，概念，用語とのいずれともつながっていることが求められる。体験，経験とつながっていない問いは，その子の切実な問いとしては成立しない。したがって，学習も成立しないことになる。」*3 と述べている。概念・用語は教室内で理解することは十分可能である。しかし，体験・経験は時に教室の枠を飛び出す必要もある。したがって，岩田の言うように教室から教室外へ，そして教室外から教室への往復運動こそが深化した学習を可能にするのである。

そこで，本研究で実践しようとする地域学習は，従来の「地域を学習する」（内容として地域学習）「地域で学習する」（教材としての地域学習）をねらった地域学習ではなく，「地域でしかできない学習」をめざしていく。
加えて，本研究が学習指導要領の述べている，「（前文省略）地域の規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連づけて考察し，地域的特色をとらえさせるための視点や方法を身に付けさせる。」（文部科学省2003改正）という地理的分野の目標(2)に正対した実践であると考える。以上が本研究の主題を設定した理由である。

2　研究仮説

自らが設定した課題の検証過程で，地道に地域の人々とふれあい，調査する体験活動は，地域に対する郷土愛や誇りを育てることができる

3　研究内容と方法

(1)　地域学習の問題点

「地域学習」かつての「郷土学習」の歴史は古く，明治24年（1891）に定められた「小学校教則大綱」にはじまる。

*長岡市立太田中学校

これだけの歴史をもちながら，これまでの地域学習の実践を見ると，地域に対する愛着や誇りを持たせることを目標にした指導は少ない。筆者自身の経験でも，やはりそういった指導は今まで行ってこなかった。それはなぜなのだろうか。本研究を進めるにあたって，ここで整理する必要がある。以下，郷土愛を育てられない地域学習の原因を述べていきたい。

① 知識詰め込みに偏った指導

前文部省初等中等教育局教科調査官の澁澤文隆は，中学校社会科において「知識詰め込みには教師主導型の講義式の授業が最も効率的だとして，教師が主役の授業を展開している。」*4 と述べている。この知見は，現状の中学校社会科授業の的を射たものである。地域学習でも知識詰め込み型授業が行われれば，地域に対する愛着や誇りを醸成はできない。

② 地域の扱い方

従来の郷土学習や地域学習の争点は，「地域を」なのか「地域で」なのかという，学習内容か学習方法かというものであった。いずれにしても，地域そのものが目的になっていない。ここに，大きな問題があったものと考える。ツールとしての地域では，本来の地域学習を行うことはできない。

③ 体験学習の不足

地域学習における体験学習の重要性は広く認知されている。例えば「『身近な地域』の場合は，自分達で調査が可能であるだけに，既存の資料に制約されず，具体的で多様な視点を設けることができる。」*5という言説に異論を唱える人は少ない。しかし，現状では経済的，時間的問題で体験学習が行われることは少ない。これでは，小森が指摘するように，地域学習が空疎な机上の学習になってしまう。

④ 地域に対する理解不足

地域には，郷土の生活をここまで発展させてきた先人の苦心や，特色ある地域の暮らし，といった学ぶべき素材が多数存在する。しかし，教えるべき教師やそこに住む子どもたちは意外に知らない場合が多い。その結果，地域学習に深みを与えられず，地域に愛着や誇りを持たせることができない。

⑵ 地域学習の視点

上述の問題点を勘案しつつ，本研究では以下の４つの視点を持って，研究テーマに迫ろうと考えた。

①多様な視点で地域の特色を考えさせる。
②生徒自身が設定した問題の解決に向けて，地域の人々とより多くのふれあいを持たせる。（体験学習の充実）
③地域学習を通して，地域の良さと今後の展望を考えさせる。
④発表活動を通じて，地域のすばらしさを地域の人々に発信する。

⑶ 研究対象と指導計画

①対象生徒　　太田中学校１～３年生全校生徒（男子：６名　女子：５名）
②学力実態　　５教科学力平均偏差値：49.8
　　（2005年４月実施のＮＲＴより）
③単元名　　「太田を知って，太田を考えよう」
④指導計画

次	過程	時間	学　習　活　動	備考
1	問題把握 課題設定	1	○生徒の目を地域に向け，地域学習への意欲・関心を高めさせる。 ○太田をより深く知るためのテーマを出し合う。 導入・事前学習：太田地区の位置，太田の産業，人口動勢など 《設定するテーマ》 ①太田の養鯉業　②棚田　③観光業　④高齢化　⑤福祉	・資料 ・地図 ・航空写真
2	追究計画	1	○テーマをもとに個々に課題を設定し，個々の課題をもとに２～３人のグループを編成する。 　そのグループで協力し合って課題の追求計画を立てさせる。 個人課題設定→課題を集約しグループ課題を設定する。→グループごとに調査計画を策定する。	・話し合い
3	調	2	○課題追求の方法として，実際に校外に出て調査を行わせる。 第１回調べ学習：聞き取り調査	・校外学習

4	査 分析深化 問題解決	4	○前回の調査を発展させ，新たな調査を行わせる。調査後，調査内容を分析・整理し，発表できるようにする。 第２回調べ学習：聞き取り調査	・校外学習
5		1	○グループの課題に対して調査した成果を発表し，他班の成果を共有させる。 班の発表（調査結果）→討議	・発表 ・討議
6		1	○まとめをもとに壁新聞の原案を個人で作成させる。	
7		2	○個々に作った新聞の原案をもとにグループの壁新聞を製作する。この壁新聞をもとにポスターセッションを行い生徒相互の学習成果を交換させる。	・発表
8		1	○文化祭で壁新聞を提示し，地域の人から意見・質問・感想を寄せてもらう。	・公開

4　研究の経過と結果

上述した地域学習の視点から，本研究の経過及び結果を述べていきたい。本来であれば，より客観性を期すために，本研究の結果を統計的に示したい。しかし，生徒の母数が極めて少ないため，生徒の変容を記述していくこととする。

⑴　多様な視点で地域を考える

地域をより深く理解するためには，多面的な理解でなければならい。郷土愛や郷土への誇りを持たせる指導であっても，地域の客観的かつ相対的な面でのマイナス面も直視する必要がある。そこで，地域の特色として産業面のみならず社会現象にも目を向けさせるようにした。

まず「太田地区の特色をあげてみよう」と発問した。すぐに「蓬平温泉」「錦鯉」と声が上がった。しかし，その後は声が出ない。そこで学区内を撮影した航空写真を見せた。すると「田んぼが多い」と答えてきた。さらに人口統計グラフを見せると「人口が年々減少している」「高齢者が多い」という発言があった。このような感想をもとに生徒個々に追究してみたい課題を設定させた。すると，次のような課題が生徒の中から出された。

〈太田地区の現状に関する個人課題〉　一部抜粋
○どうして太田で養鯉業がさかんになったのだろう　　○蓬平温泉（太田地区内にある温泉）の魅力はなんだろう
○なぜ太田地区から多くの人が転出するのか　　○太田地区に住む高齢者の人々に必要なものは何だろう
○条件の悪い場所でなぜ米作りをするのか　　○水田で使う水はどうやって確保しているのだろう
○太田地区で作られているお米はおいしいのだろうか　　○稲作の後継者はいるのだろうか

これら生徒個々が設定した課題をグループ化してまとめ，次のようなテーマが設定された。このテーマは，予想される生徒の反応とほぼ合致した。

A　太田の錦鯉　　B　太田の観光　　C　太田地区の過疎化　　D　太田の高齢化　　E　太田の米作り

以上のテーマに対して，調査してみたいテーマを募った結果，１テーマに２～３人のグループができた。

⑵　ふれあい体験学習の充実

この視点は，本研究で最も力を入れた部分である。地域の人々とふれあい，生の声をじっくり聞くことで，見えていなかったことが見えてくるはずだと考えていたからである。したがって，本単元のほぼ半分の時間をこの学習に組み込んだ。この体験学習を通して，結果的に全てのグループで郷土を再発見することができた。その中で，ここでは過疎化グループと錦鯉グループについて述べていきたい。

当初過疎化グループは，過疎化の原因は「太田は生活するのに不便だから」と考えていた。そこで，太田を出ていった人と太田に残った人の両方から丹念にインタビューするよう指導し，生徒は実行した。その結果，意外にも「太田の何事にも助け合い協力し合うコミュニ

写真１　地域の人への聞き取り調査

ティーは素晴らしい」という答えが両者から返ってきた。残った人からは，「だから残った」という回答を得，出ていった人からは
「だから残りたかった。しかし経済的な理由で出ざるを得なかった」という返事が返ってきた。

経済的な理由とは，稲作農家にとって物価上昇ほど米価が上がらず，結果として実質的に米価が下落した。その結果，大規模経営ができない棚田の収入では生活できないということだった。また，棚田は不動産価値がなく財産を子どもに残せないということも大きな要因であった。

これらの調査から，このグループは太田の過疎化が単純な理由ではないことを知った。その一方で，経済的な理由が満たされれば地元で生活したいという人々の声を聞き，太田の良さを再発見することができた。

錦鯉グループは，なぜ太田地区で養鯉業がさかんになったのかを調査することとなった。そこで，地区内にある養鯉業者に聞き取り調査をすることになった。その結果，次のようなことがわかった。

A　錦鯉を飼育する池はもとは棚田のための用水池だった。
B　用水池の泥が錦鯉の発色を鮮明にする。
C　錦鯉は太田地区が発祥の地である。
D　出荷先は国内よりも海外，とりわけヨーロッパ向けが多い。

この調査でわかったことをさらに裏付けるために，生徒は小千谷市の「錦鯉の郷」を訪問した。これは，他地域の養鯉業と太田地区を比較することで，太田地区の養鯉業の特徴を浮き彫りにする目的もあった。その結果，上述Cについては確認することができた。また，上述A・Dについては，地域によって，業者によって差異があることがわかった。生徒にとっては上述のC・Dが特に印象に残ったようである。右の図2で示したB子の感想がそれを物語っている。

・・・日本の社会が便利さや，物質を追い求めているうちは，太田の過疎化は進んでしまうような気がした。Kさんが言うように，日本がヨーロッパやアメリカのように，自然に価値を感じる社会になれば，太田に住む人が増えるのかもしれない。・・・

図1　A夫の調査後の考察より抜粋

通学途中で目にする錦鯉の発祥の地が太田だったのは驚きだった。それより驚いたのは，太田の錦鯉が海外で多く売られていることだった。こんなに身近にある錦鯉が世界で認められていることがうれしかった。また，海外向けの錦鯉は金色が売れると聞き，国によって好みに差があることもわかった。

図2　B子の調査後の感想から

・・・高齢化率が長岡市平均の倍以上あってショックだった。若い世代がどんどん出ていって地域がさびれていくように感じた。しかし，アンケートをとったり地域の人々の話を聞いて，この地域にはデパートやコンビニはないけど，助け合いやいたわりの精神など，人と人の豊かな絆があることがわかった。そんなことがわかると，最初に感じていたショックもたいして大きなものに感じなくなった。

図3　C夫の調査後の感想から

(3) 地域の現状と展望

地域学習は調査によって得た事実認識だけで終わってしまう場合が多いが，その認識をもとにした展望がなければならない。ここでは，高齢化グループの取り組みを取り上げたい。このグループは，まず高齢化の実態を長岡市役所太田支所で調査した。その結果，太田地区の高齢化率は41.0%（長岡市：20.1%）であることを知った。また，年々高齢化率は上昇し続けていることも確認した。そこで，「太田地区から高齢者が離れないのはなぜだろう」「高齢者が多く住む太田地区に必要なものは何だろう」と問いかけた。これは，高齢化率の高さは地域の絶対的なマイナス要因ではないこと，高齢者福祉の必要性に生徒の目を向けさせたかったからである。この問いの後，生徒は地域住民にアンケートを実施する必要性を訴えてきた。そこで全戸数の約20%にあたる50戸に対して紙面によるアンケート調査と27戸に対して聞き取り調査を実施した。このアンケートの質問は，「太田の良さは何だと思いますか」「この地区に必要なものは何ですか」というものだった。このアンケートの集計で，高齢者が太田の良さは「人と人との絆の強さ」であると考えていることがわかった。同時に，人が集まれる場所がほしいと考えている高齢者が多いことに気付いた。そこで，宮内の老人福祉施設を訪問し，具体的にどのような施設が太田に必要なのか考え始めた。その結果，地区の温泉を利用した施設や場を高齢者に提供すべきだと提案した。この調査を通じて，生徒は具体的な展望を描くことができた。

(4) 発表活動

発表活動は学習活動をまとめ，学習者以外に対して学習成果を発信するという点で重要である。本授業では，学習の成果を右の写真２のような壁新聞にまとめさせた。この壁新聞を作成する際には，レイアウトや内容などは原則自由であると生徒に話した。１つだけ条件を出したのは，必ず「提案」を盛り込むよう指示したことである。この指示は，北海道の小学校教師である温泉敏の実践を参考にした。温泉は「『提案する社会科』での終わり方は『調べて』『まとめる』という一連の活動にとどまらず，『調べて』きたことを受けて『提案』という型で活用するまでに至る。そこには子どもの“こだわり”を生かすこともできるし一連の活動を発展させることもできる。いわば『創造的な活動』が可能なのである。」*6 と述べ，「提案」が発展的な学習に導いてくれることを説明している。

写真２　米作り班壁新聞

しかし，たとえ「提案」を盛り込んだとしても，壁新聞を作っただけで本単元を終了してしまっては，生徒にとってこの学習が完了したと思わせてしまう危険がある。一般的な学校であれば，他の多くの生徒で質疑や討論の場を設ければ，おのずと学習者自らが新たな課題に行き着くであろう。そして，学習が発展的に深化していくことが可能である。しかし，当校では全校生徒11名という中で，そのような場を設定することは物理的に困難である。かといって，教師がアップ・ダウン的に次の課題を提示するのは，生徒の学習意欲を減退させる可能性がある。そこで，保護者や地域の人に学習成果を見てもらい，そこから次の課題へつながるような場を作ることとした。具体的には文化祭に学習発表の時間を設定し，壁新聞を使って学習成果を発表した。その発表に対して地域や保護者の人から意見や感想，質問を出してもらった。地域や保護者から出してもらった意見や感想，質問は概ね学習を賞賛するものが多かった。残念ながら，こちらが意図した次の学習に発展していくようなものは少なかった。次の学習につながる意見を要約すると以下のようなものである。

○より高価な錦鯉を作るために，養鯉業者は品種改良を重ねていることを知っているか。最近ではバイオテクノロジーも導入している。
○県外からお客さんを呼ぶために旅館業者はどのような工夫をしているか調べたか。
○高齢者が住みよい町にするために，具体的にどのような町づくりを考えているのか。
○棚田には天然のダム機能があり，水害や土砂崩れを防ぐのに役立っている。棚田を米作りの面だけ見ていては十分ではない。

図４　発表後の地域・保護者の意見や感想，質問

大人の意見は鋭くて，内容が深かった。質問されて自分達の学習が浅かったことに気が付いた。たまたま斜面に田んぼを作ったというだけでなく，田んぼにはいろんな働きがありそうだ。次の学習では米についてだけではなく，田んぼの働きや歴史について調べてみたい。

図５　発表後のＤ子の感想から

５　研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究を通じて，生徒に確実に定着しつつあるものは「郷土への愛着」や「郷土に対する誇り」である。授業ごとに書かせた感想から，如実にその変化を把握することができる。本単元の当初は，地域に関する関心や興味，知識・理解が薄かった。しかし，学習を重ねるごとに自ら設定した課題に対して深い関心と知識が醸成されていった。以下のＥ夫の変化はその一例である。この変化を可能にしたのは地域の人々との「ふれあい学習」であった。地域の人との会話やアンケート調査，聞き取り調査を通じて生徒の学習に深みが加わった。まさに，冒頭引用した岩田一彦の言う「学習は，体験・経験と概念・用語との往復運動の中で成立する。」を実践できたように思う。さらに，小森が願った「ふるさとを再発見し，郷土を愛する子どもになってほしい。」が少なからず実現できたのではないかと考える。

その他の成果としては，疑問に思ったことを解決するため，実際に現地に見に行くことで「社会観察力」が育成で

きた。棚田を見て，休耕田が多いことに気付き，なぜ生産調整をするのかを疑問に思った生徒がでてきた。また，普段通学に使っている道路が，高齢者にとって多くのバリアがあることを再認識した生徒もいた。この学習を通じて新たな視点を持つ，新たな視点に目を向ける力が付いたと考える。

〈最初の授業〉・・錦鯉は高く売れるから養殖しているのだと思う。なぜ始まったかは知らない。

⇩

〈最後の授業〉錦鯉は太田の自然や人々の努力によって発展してきた。守るべき財産である。・・・

図５　Ｅ夫の感想より

⑵　研究の課題

生徒の個性を生かしながら，主体性を発揮させて学習に取り組ませたかったが，その点で十分満足できる結果にはならなかった。時間に制約があったせいもあるが，教師が主導していく場面が多々あった。このような学習を進めていく上では，もう少し時間にゆとりを持つ必要があった。また，目的に応じて訪問しようと考えたとき，適任者が見付けられない場面もあった。普段から地域の中に教師自身がとけ込み，コミュニティーの一員である自覚と行動が求められると思った。

本研究とは問題がそれるが，より高位の学習にステップアップしようとするときに，それを下支えする「基礎・基本」が欠落していてはステップアップするのが難しいという問題も感じた。例えば，先に示した休耕田を見付けた生徒にしても，いわゆる減反政策についての知識がないのである。そのため，その政策を理解するところまで戻らなければならない。また，数は少なかったが文書資料にあたったときに，読解力の不足から資料の読み取りができなかったということもあった。今後の社会科学習の課題としたい。

注

*1）小森ケン子　『ふれあい体験を生かす社会科の授業』明治図書，1994年，p.12
*2）清水章夫編　『郷土を生かす社会科教育』さきたま出版会，1986年，p.15
*3）岩田一彦　『社会科固有の授業理論』明治図書，2001年，p.124
*4）澁澤文隆　「中学校社会科改訂の課題と方針」『社会科教育』No.473　明治図書，1999年，p.118
*5）澁澤文隆・佐伯眞人・大杉昭英　『中学校新教育課程の解説』第一法規，2000年，p.59
*6）温泉敏　「提案する社会科での終わり方・まとめ方はこれでいいの」『社会科教育』No.383　明治図書，1993年，p.36